

日本宣教と世界宣教

第6回日本伝道会議にあわせて『日本宣教のこれからが見えてくる—キリスト教の30年後を読む』（いのちのことば社）と題されたデータブックが発行された。「教会消滅？」というショッキングな文字が帯を飾る本の内容は、日本の教会の将来が決して明るいものではないことを示唆している。教職者の平均年齢67.8歳、70代80代の教職者が占める割合が全教会の約半数と推測される。一方で、将来の教会を担うべき20代30代の教職者の割合は2%しかない。日本のプロテスタント教会の全教会数約7,900で今後20年ほどの間に現在の教職者の約半数がいなくなるとすれば、その数に匹敵する人々が神の召しに答えて教会の働きに押し出されなければならない。データブックには神学校の現状も取り上げられているが、どの神学校でも学生数が減少し、卒業生が教会教職者となる割合の減少も報告されている。このままでは近い将来無牧となる教会が急増化することは避けられそうにない。

このような切実な国内の教会の必要を前にして、貴重な若い人材を世界宣教へ送り出すような余裕はとてもないという声をよく耳にする。教会が小さく経済的にも困っている状況で、世界宣教に携わりたいという信徒がいても教会として送り出すことはできないという声も、宣教師をリクルートする側として私自身何年も前から聞かされてきた。しかし私は、将来の日本の教会を担うべき若者たちを育成するためには、世界宣教へと彼らを送り出すことが一つのカギを握っていると感じている。

OM日本はミャンマーの複数の孤児院を支援し、毎年日本からも訪問する働きを15年間続けてきた。貧しい孤児院が支援により自立していくと、そこでの礼拝が周辺住民への伝道の拠点となって、教会となり、施設の建物を利用して自前で伝道者を養成するための聖書学校を始めることが多くある。先日訪問した孤児院でも、十名の若者が住み込みで学んでいた。志願者があまりにも多いため既存の聖書学校ではとても対応できず、自前で設立してしまうのだ。若い神学生たちを見て、この国でこれほど多くの若者が伝道者として召されているのに、

2017年度 JOMA 会長
OM 日本 理事長

酒井信也



なぜ日本では召される若者たちがあまりにも少ないのかと思わされる。日本の若者たちは神に召されていないのだろうか？ そんなことはないはずだ。神はご自身の栄光の教会を牧するための必要を満たして余りある数の若者たちを、日本でも召しておられるに違いない。しかし日常生活においてあまりにも周りの雑音が大きく、召しておられる神の声が聞こえないのではないだろうか。

国外に住む日本人が現地で救いに導かれる割合が高いことをよく聞く。実際に、身近にもそのような人たちが何人かおられる。日本社会を離れた場所で神の声を聞いた人たちだ。牧師、伝道師、宣教師といった教職の働きへの召しの声についても同じことが言えるのではないか。90年代からこれまでOMを通して世界宣教の現場へ送り出した若者は60名を超える。その多くは歴代の福音宣教船ドゥロス号、ロゴスII号、ロゴス・ホープ号に2年間のボランティアとして参加した。

参加者は初めから宣教を志している人だけではない。その多くは、ボランティア活動を通して世界を見たい、経験したいという若者で、高校を卒業してすぐの参加も多い。しかし実際に世界での宣教に携わり、神の働きに触れ、神に取り扱われる体験を通して変えられていく。2年の後に日本へ帰る頃には、次に神が導いておられる働きは何かと探り始め、神の召し声を聞こうとする。その召しは、決して世界宣教に対する召しだけではない。実はその多くは日本の教会に仕えるようにとの召しなのである。短期宣教師体験の後、帰国して神学校へ進み、牧師、伝道者、伝道団体スタッフ、あるいは宣教師などになった人は参加者の実に半数以上にのぼる。世界宣教の現場へと若い人たちを送り出すことは、日本伝道を担うべく召されている人々を呼び覚ますためでもあるのだ。

関西聖書神学校では、世界的な視野に立つて遣わされている地域に仕える伝道者を養成することをその教育方針としています。そこで、国際的な視野と文化への感受性をもちつつ、細やかかつ大胆に、福音に生き、福音を提示する人を育てることを願って、3年に一度、短期海外宣教旅行を実施しています。2014年夏に第一回目の旅行を、そして、本年の7月10日から20日まで、OMFの宣教師の方々の全面的な協力を得て、第二回目の旅行をカンボジアで行いました。9名の神学生（男7、女2）と私が参加しました。

宣教旅行の準備は、5月から始めました。週に一度、OMFが短期海外宣教旅行のために準備したパンフレットを用いての学びを7回行いました。

7月10日に関西国際空港を出発、翌11日から13日まではプノンペンのOMFセンターを宿舎として、キリングフィールド、テウル・スレン虐殺犯罪博物館、礎の孤児院、キリスト教出版社、人身売買犠牲者ケア団体を訪問しました。14日から16日にかけては、ニャックルアン（プノンペンから一時間半ほど）とクラチェ（プノンペンから四時間ほど）の二箇所を別れ、教会や信徒の訪問、交わり、礼拝などを通して、地方の教会の働きと戦いの現場を体験しました。17日から19日にかけては、シェムリアップへ移動し、地雷博物館とアンコール遺跡群を訪問しました。19日夜にシェムリアップ空港を出発し、20日朝、関西国際空港に到着しました。なお、旅行の期間中、一日に一度は全員で集まり、宣教師の方に導いて頂いて、振り返りの時を持ちました。さらに、全期間終了後、全員が、今回の旅行を振り返るレポートを作成しました。

今回の経験は、観光では知ることのできない、カンボジアのさまざまな面を体験した、「神とその民とその民の歴史にカンボジアで出会う旅」でした。そして、この国の過去と現在と将来を垣間見ました。



クラチェ教会での礼拝後

カンボジアの過去としてクローズアップされたのは、ポルポト政権時代の虐殺の歴史でした。虐殺の現場にあふれる痛みと記憶に心が押しつぶされそうでしたし、神義論について考えざるをえませんでした。さらに、虐殺を現代史の文脈の中に置いて考える機会も与えられ、西側諸国の一員である日本に生きていた者の無関心とイデオロギーが、実はこの虐殺の遠因でもあることを知りました。その一方で、アンコール遺跡群がこの国のすばらしさの一端を表していることをお聞きし、「発展途上国」という単一の見方ではしか現状を見ることができないことへの警告をいただきました。

カンボジアの現在、特に孤児院と人身売買被害者救済の働きは、東南アジア諸国の問題と希望を見るようでした。神のあわれみに押し出されたクリスチャンが自らの遣わされている場所にある問題に向き合っていること自体が希望です。さらに、カンボジアの地方の教会の現実が、日本の地方教会と似ている点にも驚きました。日本の教会の「閉塞感」は井の中蛙であるわたしたちの勝手な思い込みでは、とこれまでとは異なった視点をいただきました。

最後に、現地の働き人を育てることに専念している宣教師たちの姿に、教会の中心となる働きは「人を育てること」であるという事実を再確認しました。そして、そこにカンボジアの将来がひらかれていることを覚えました。

今後も、世界に仕えることのできる働き人を海外短期宣教旅行を通して育てたい、と願っています。



夜の振り返りミーティング



アンコールワットにて

私たち日本同盟基督教団は、現在7組の宣教師を6カ国に派遣しています。そのうち、昨年から今年にかけて派遣（任命）した宣教師たちをご紹介します。

まず昨年9月には、タイ・バンコクへ河野晃・美千代宣教師一家を派遣しました。出発時4人家族でしたが、現地で3人目のお子さんが与えられ、現在5人家族となりました。河野宣教師夫妻は、タイで宣教活動をしている韓国の長老系宣教団（Korean Presbyterian Mission 以下KPM）との協力のもと、その宣教団が運営しているバンコク・グレース・インターナショナル・スクールにて語学研修をしながら、地域へのアウトリーチや教会での説教、中高科の子どもたちのリードを行っています。タイでは教育を通じた宣教がとても用いられており、いまその現場で奉仕し学ばせていただきながら、先々は青年宣教、教会開拓の働きをスタートしたいと願っています。



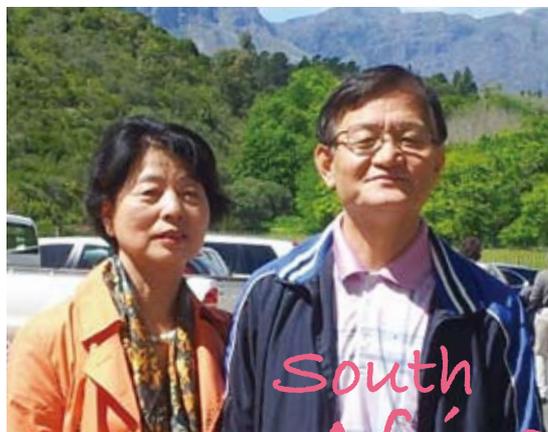
タイ・バンコク 河野宣教師一家

Bangkok

また、同じく昨年9月には南アフリカへ金煥・朴貞玉宣教師夫妻を派遣しました。この夫妻は20数年前に南アフリカの神学校で学ばれ、その際に様々な課題（人種間の差別や隔たりなど）を抱えたこの国に、いつか再び遣わされたい、との思いを与えられました。そして20数年間の日本での宣教・牧会奉仕を終え、「和解の福音」を携えて、再び南アフリカへと遣わされました。

この9月から、現地の改革派教会と協力して、留学生を中心とした学生たちの聖書の学びを開始する予定です。先々は宣教の働きに用いられるミッションハウスが

与えられるようにと願ひ、祈っています。



南アフリカ 金宣教師夫妻

South Africa

また、今年東南アジアへ一組の一家を派遣しました。主が出会わせてくださる方々に証しをしていくことを願っています。出発して間もないですので、まずは家族、特に子どもたちが新しい環境に慣れることができるようお祈りください。

そしてこの9月、タイ・チェンマイに長谷部愛実宣教師を派遣予定です。長谷部師はチェンマイ日本語キリスト教会での牧会と宣教のために遣わされます。チェンマイの教会の教会形成とともに、教会を通してタイの人々に仕え、福音の種まきと実の刈り取りともに担うことを目指しています。ビザの取得ができましたら、9月末に出発予定です。ビザ取得が順調に進みますようお願いください。



タイ・チェンマイ 長谷部宣教師

Thai Chiang Mai

以上、いずれの宣教師も第1期をスタートしたところです。主の確かな導きのうちに、働きが祝されますようお祈りください。

新任 事務局 スタッフ紹介

今年のJOMA総会において、主事・事務員公募の件についてご審議頂き、ご承認頂きました。これに基づき、5月～6月にかけて「主事または事務員1名」の募集をしましたところ、応募者として大間哲兄（イムマヌエル綜合伝道団富士見台キリスト教会員）が与えられました。7月の役員会でご本人面接の上、協議しました結果、大間兄のJOMAスタッフとしての採用を決議しました。

幸い、御茶ノ水クリスチャンセンター内に事務所スペースを確保でき、既に9月より週一日程度の勤務を開始頂いています。これからの大間兄のお働きのために、覚えてお祈りくださいますよう、お願い致します。

JOMA役員会一同

ご挨拶

大間 哲

「大間さんのパッションは何ですか？」

JOMAの面接で尋ねられた時、私は悩んでしまいました。私には、宣教師の皆様方のように海外に行くような気力も体力も、決心も欠けていることが、自分でわかっていたからです。それで、私は何が与えられ、何をパッションとして生きているのかを神様におたずねしました。その時に、「平和の君」(イザヤ9:6)という言葉が与えられました。

私が導かれたのは、母校である国際基督教大学（ICU）の同窓会の企画で『メサイア』を歌った事がきっかけでした。神様は私に歌う事を好きという感情をお与えになりながら、私には、絶対音感がなく、楽譜が読めず、他の人の声に釣られるという合唱人としての三重苦もお与えになりました。ピアノも弾けない私は、生まれて初めての合唱参加で、パソコンに演奏させて必死に曲を覚えめました。そして、そのデータを世の役に立てていただくこと、ネットで公開したのです。その時に、曲の解説も書く事を思い立ち、その為に53曲分の歌詞の内容である80余りの聖句を聖書で探して読みました。これによって、私は主を知ったのです。神様の不思議なご計画。もし、三重苦がなければ、私は聖書を読まなかったでしょう。そして、その第12曲の歌詞の中にある「その方は、……平和の君と呼ばれる」という部分は、大学時代に叩き込まれた「神と人々とに奉仕し、世界平和に資する人を育てる」というICUの理念と共に、いつしか私の行動原理となり、パッションとなっていったのです。

私の所属するイムマヌエル綜合伝道団は、戦後すぐに「宣」を志し、宣教師を派遣したとのこと。それを知った時は、驚きました。そして被宣教国である日本が、西洋諸国のように宣教をする事の意義を考え始めました。民族的な意義もあるかもしれませんが、世



界では富める国（文明的だけではなく文化的にも）の一つである日本から、より貧しい国への「富の再配分」という意義もあるでしょう。争いは、妬みから起こり、多くの妬みは格差が生むという事実があるならば、「福音という宝」の再配分は、まさに世界平和に資する事に他ならない、と私には思えたのです。そうであるならば、私が平和に拘る事も神様の御心にかなうことかもしれない、と。

私は、前線で宣教をなさっている方々に比べれば、本当に小さな働きしかできません。前述のように、献身し自ら前線に立つ事も出来ない、覚悟の足りない者です。しかし、神様はこの小さき者にも、「ITのスキル」と「ファシリテーション（調整）力」を与えて下さり、働けるようにしてくださいました。

私の名前OMAはOverseas Missions Associationの頭文字と同じです。これは、何の力もない私が、JOMAの皆様から覚えていただけるように、と神様が下さった名前なのかもしれません。私は、JOMAを構成する各団体の方々の連絡の一端を担わせていただくことにより、実に僅かですがお役に立ち、ひいては、平和の君であるイエス様のお働きに仕えさせていただければと願っています。

「平和を求めて、これを追え」（ペテロ3:11）
冒頭のお尋ねの時、私は、こうお答えしました。
「私のパッションは、『平和』です。」

日本イエス・キリスト教団

- * 3組5名の宣教師の働きが用いられ、宣教の働きが前進しますように。
- * 1組2名の宣教師候補（台湾）がよき準備をなすことができますように。
- * 世界宣教への祈りが強められますように。

日本ウィクリフ聖書翻訳協会

- * 各宣教師の安全と健康の守りのために。奉仕が聖書翻訳の祝福となるように。
- * 異文化宣教セミナー等の主催プログラムが用いられるように。
- * 世界宣教・聖書翻訳を志す若者がウィクリフに繋がることできるように。
- * ウィクリフがその経験やノウハウを活かして日本の教会に仕え、良いインパクトを与えることができるように。
- * 新しく総主事に就任した松丸嘉也宣教師のリーダーシップと新しい体制が祝され、聖書翻訳宣教に用いられるように。

日本バプテスト教会連合

- * タイ・チェンマイに派遣している福間宣教師夫妻の健康と働きの祝福のために。スポーツミニストリーによって集められている子どもたちの救いと霊的な成長のために。
- * ネパール、インド、フィリピンと新しい領域への宣教師派遣のために。宣教師候補が育って、派遣されていくように。

日本同盟基督教団

- * 各宣教師の支援体制が強められ働きが支えられるように。（現在、7組の宣教師を6カ国へ派遣しています。）
- * 今年派遣された一組の宣教師一家（東南アジア）と9月末派遣予定の長谷部宣教師（タイ・チェンマイ）が宣教地にスムーズに適応できるように。
- * アジア各国の教会と良い宣教協力関係を築いていくことができるように。ともに世界宣教に前進していくことができるように。
- * 新たな宣教地と、そこへ派遣する宣教師を主が与えてくださるように。

書籍紹介



「パッション・フォー・ミッション ——感謝と喜びと充実の人生への招き」

牧野直之著 400円+税 イーグレイプ社

中学生の時に信仰を持ち、伊豆夫人と共にタイ国で大学生伝道をされ、OMF 新人宣教師研修所所長、OMF 日本委員会・総主事、JECA ぶどうの樹キリスト教会・牧師として主に仕えてこられた牧野直之師が、ご自分の経験から、主に従う喜びと世界宣教の重要性をまとめてくださいました。各章の終わりには世界宣教について考える質問も用意されていて小グループの学びにも役立ちます。笑えるエピソードも満載！（OMF 日本委員会事務所またはキリスト教書店で購入できます。）



アンテオケ宣教会

創立40周年記念 オープンフォーラム

日時：11月23日（木祝）14:00～16:00
場所：お茶の水クリスチャンセンター 8F チャペル
是非ご参加下さい！

参加ご希望の方は、①お名前（ふりがな）、②年齢（30歳未満、30代、40代、50代、60代、70歳以上）、③団体名もしくは教団名と教会名、④ご職業、⑤ご住所、⑥電話番号をお書き添えの上、オープンフォーラム係へメールでお申込み下さい。

jamoffice1977@gmail.com



欧州宣教祈祷会のお知らせ

日時：10月14日（土）10:00-12:00
会場：福音キリスト教会西荻チャペル（福音伝道教団）
〒167-0042 杉並区西荻北4-12-12

欧州にある30を越える日本語教会、日本語集会を覚えて祈る集いで、欧州の諸教会から送られてきた課題を祈ります。在欧日本人宣教会から派遣されドイツミュンヘンで宣教しておられる安藤里佳子先生、OMFから間もなくイギリスに派遣される予定の相馬裕美先生をお迎えして、お話を伺いともに祈りの時を持ちます。（祈祷会のあと有志でランチをともにしたいと思います）。

お詫びと訂正

本年3月に発行しました「2017年度 JOMA 加盟団体派遣宣教師一覧」の、日本ウィクリフ聖書翻訳協会の記述に以下の誤りがございました。お詫びして訂正いたします。

- * 鳥羽 季義・イングリット
派遣国（地域）誤：「南アジア」 → 正：「日本」
働き 誤：「聖書翻訳」 → 正：「教会訪問中」
- * 土井彰・圭子
働き 誤：「彰：総主事 圭子：メンバー ケア担当主事、祈りのミニストリーコーディネーター」
→ 正：「教会訪問中」

今後、このような誤りがないよう、チェックの仕組みを見直すと共に、発行前に必ず各団体ご担当にもご確認いただくタイミングを設けるようにし、再発防止に努めて参ります。

事務局住所変更のお知らせ

事務局スタッフと共に事務所スペースも与えられましたので、事務局の住所が変更になりました。
新住所 〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台2-1 OCCビル313